

博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成25年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

プログラム名称	未来共生イノベーター博士課程プログラム	申請大学名	大阪大学
申請大学長名	平野 俊夫		
プログラム責任者	星野 俊也		
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総評として、随所に熱意と工夫が見られ、かなり良い印象である一方、キャリアパスの観点からは、前途揚々とはいえない厳しい状況も指摘できる。 ・大学の所要の設備は整備され、プログラム担当者の質と量も大阪大学の地力からして申し分ないと予測していたとおりであった。このプログラムの成否は、入学する学生の質の確保と、プログラム担当者間の連携如何であろう。 ・入学者は、初年度 34 名の志願者から 17 名、その内、留学生 2 名という結果であった。特定の研究科に偏らず、多様な人材を集めているところは評価できる。多様な研究科に所属しているということから、英語の試験をせずに、小論文、面接中心の選抜をした結果、英語力に格差が見られ、教育面での対応を迫られている。 ・いわゆる在日韓国朝鮮人と被差別部落について正面から取り上げるカリキュラムは、日本国内マイノリティー問題における現実の大問題を学ぶということと、大阪の特徴を生かすという両面から高く評価したい。このカリキュラムが学生たちへ強いインパクトを与えていることも明確に検証できた。 ・学生達が相互に切磋琢磨できる場の提供、教員スタッフとの週一回のホームルームと月一回のイブニングミーティングなどの工夫が活かされており、学生との面談からは、学修環境の雰囲気の良いを感じることができた。 ・教員組織にまとまりが見られ、定期的な会合により、常に改善を積み重ねられる体制ができている点は評価できる。 <p>2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語の学習について博士課程前期 1 年生の 9 月に 2 週間のロンドンでの語学研修が義務付けられており、力を入れているとのことであるが、米国で修士号を修得した者や、帰国学生などの海外体験が豊富な者と比較して見劣りしないためにも、また、英語を駆使して世界で活躍という趣旨からも、さらなる努力が必要と考える。とりわけ、英語でのディスカッション能力を磨く学習が期待される。 ・制度面について、改善すべき点は以下二点である。 <ul style="list-style-type: none"> 第一は、ロンドンでの短期研修についてより柔軟性を持たせ、他のヨーロッパ都市での視察の機会などを併せて与えることも検討する余地がある。 第二は、研究科によって、当プログラムでの単位が、その研究科の単位として認められないところがあるとのことだが、本プログラムの意義に関することであり、重大な問題が生じるおそれがあり、再考が必要である。 ・最も対処が必要と思われるキャリアパスについては、国際機関や J I C A を目指す場合は具体的な実現性を感じるが、民間企業への就職については、このままでは実現性が弱い。経済界からもメンターの導入などの仕組みを検討すべきである。さもないと、修了者が消去法的に研究職を目指すような結果になってしまう恐れがある。また、国内マイノリティー問題に強くなり、災害時の避難問題などに力点を置けば、地方自治体にもニーズがあると考えられる。これから発展すべき分野なので強化が容易ではないが、対処してほしい。 ・留学生のキャリアパスを明確にし、留学生の人数の確保をしてほしい。 			